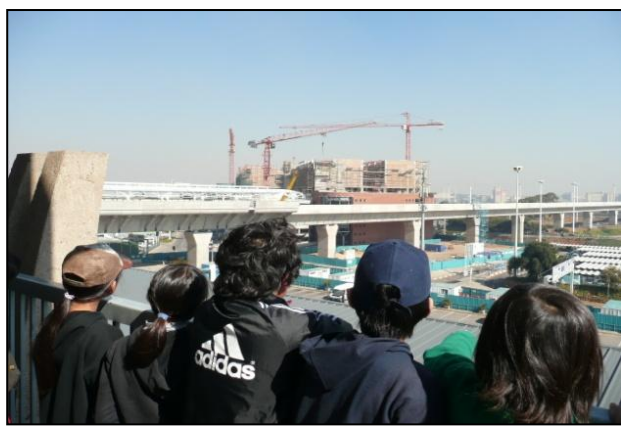


JOBURG EXPRESS

3月 発行 No.10

ヨハネスブルグ日本人学校 中島緑郎

学習発表会までの取り組みを振り返ってみます。



お知らせしてきたように、これまでいろんな場面で子どもたち自身が南アフリカの人と接する機会を作ってきました。

1学期の校外学習では建設中のサッカーシティやORタンボ空港を見学し、自分たちの足で今現在の南アフリカがワールドカップに向けてどんな取り組みをしているのか、生の情報を得てきました。実物の競技場は大変大きくて立派で、ワールドカップに向けて働くサッカー協会の方々は生き生きとしていました。空港では親切な税関職員の方が展望デッキへと案内してくださいました。

現地校である IR グリフィス校との交流では、南アフリカについて自分たちが疑問に感じていたことをたくさんの生徒に質問して回答を集めました。IR の生徒たちは子どもたちのカタコトの英語にも、一生懸命答えてくれました。



そんな中からだんだんと学習発表会で発表するテーマが絞り込まれてきました。子どもたちにとって一番身近な視点である『遊び』について両国を比較しようとした際には、日本人学校で働いている現地スタッフの方々にはずいぶんと助けていただきました。どんな遊びがあるのか、どうやって遊ぶのか、何度も質問し、手ほどきを受けました。



いつの間にか調べるよりも一緒に遊ぶことに夢中になってしまったりもしたけど、そうやって南アフリカの人と“楽しさ”の感覚を共有していきながら、子どもたちはいつの間にかこの国の人々を『違う国の人』ではなく『同じ人間』としてとらえ始め、心の距離感をちょっとずつ縮めていったのです。

さらに芸術鑑賞会でのメカさんが所属するチャーチ・クワイア DINOTSI TSE PUTSWA の皆さんによるコンサートでは、そうやって縮めてきた距離感は一気にゼロになりました。舞台と客席を隔てていたものがなくなっ

て、違う国の歌を日本の子どもたちが楽しそうに歌う様子は、私自身が願っていた姿でもありました。肌の色とか言葉とか、外側にあるものは違うけれど、心の中にある感動は一緒なんだ、内側はみんな同じ人間なんだ、わかりあえるものがあるんだ、と実感してもらうことができました。

思い返すと、どの体験にも必ず人との触れ合いがありました。色々な場面でいろいろな立場の南アフリカ人と接してきましたが、どの人も日本の子どもたちを本当に温かく受け入れてくれました。“日本人は暗いからキライだ”なんていう人は誰もいませんでした。それまでの私たちは“南アフリカは強盗や殺人犯ばかり”なんて思いこんでいたにもかかわらず、触れ合った誰もが明るい笑顔で陽気にあいさつしてくれ、遠い国から来た日本の子どもをととても大切に扱ってくれました。



に引きこもってしまうことなくどんどんと交流の輪を広げていけたらいいな、と思っています。

さて、ちょっとマジメな通信が続いてしまいました。次号はこの夏休み(12月～1月)に訪ねたエジプト共和国とレソト王国の様子をお知らせします。お楽しみに!!

アパルトヘイトの傷跡を引きずり、白人と黒人の貧富の差が歴然と残り、貧困からおこる犯罪も多いこの国ですが、だからこそ可能性があります。肌の色とか国籍とか言葉とか、未だに人類が乗りこえられずにいる問題を克服し、何かとても大切なことを共有しながら一つになれる最初の国かもしれない、そんな可能性です。

多様な人種がいるこの国は『虹の国(レインボー・ネーション)』と呼ばれます。日本人学校という特殊な環境ではありますが、



To Be Continued !